調査研究終了報告書

研究分野：環境

調 査 研 究 名	希少水生生物の生息地再生に関する研究
研究者名（所属） ※ ○印:研究代表者	○中島淳、石間妙子（環境生物課）、鬼倉徳雄（九大院農）、島谷幸宏（九大院工）
本庁関係部・課	環境部　自然環境課
調 査 研 究 期 間	平成　２３　年度　－　２５　年度　（　３年間）
調 査 研 究 種 目	１．■行政研究　□課題研究 ■共同研究（共同機関名：九州大学　） □受託研究（委託機関名：　） ２．□基礎研究　■応用研究　□開発研究 ３．□重点研究　□推奨研究　□ＩＳＯ推進研究
福岡県総合計画	大項目：環境と調和し、快適に暮らせること 中項目：豊かな自然環境を守る 小項目：自然環境の保全
福岡県環境総合ビジョン（第三次福岡県環境総合基本計画）※環境関係のみ	柱　：自然共生社会の構築 テーマ：生物多様性保全・再生のための総合的な対策の推進
キ ー ワ ー ド	①　絶滅危惧種　②生物多様性　③自然再生　④保全　⑤水生生物

研 究 の 概 要

１） 調査研究の目的及び必要性

生物多様性の保全は世界的な緊急課題であるが、特に水域における生物多様性の消失は大きな問題になっている。福岡県には希少な水生生物が多く、保全上重要な地域である。近年では積極的な保全対策として、自然再生・生息地再生が試みはじめられているが、その手法や効果については検討すべき課題が多い。今回、本庁自然環境課より希少野生生物の生息地再生に関する研究提案があったことを踏まえ、希少水生生物の効果的な生息地再生手法の確立を目的として本研究を実施する。

２） 調査研究の概要

平成23-24年度は淡水魚類のヒナモロコ（環境省・福岡県RDB絶滅危惧IA類）と水生昆虫のコバンムシ（環境省RDB絶滅危惧IB類・福岡県RDB絶滅危惧IA類）を対象として、分布現状・生息地の調査を行った。平成23-25年度は行政機関等と連携し、水生生物の生息地再生を目的とした湿地ビオトープの造成を行い、モニタリング調査を行った。また、生物の生息地に配慮した環境改変の事例についても調査を行った。

３） 調査研究の達成度及び得られた成果（できるだけ数値化してください。）

ヒナモロコ、コバンムシについて生息地として適する環境構造の把握を行い、これらの種を保全する上で必要な環境構造についての知見を得た。また、県内に造成した湿地ビオトープにおいて3年間通して毎月の調査を行い、水生生物各種の定着様式や、生息地再生地として造成すべき環境構造が明らかになった。また、本調査を通して生息地再生において外来種対策が重要であることが示唆された。

４） 県民の健康の保持又は環境の保全への貢献

福岡県版レッドデータブックにおいて絶滅危惧種として選定されている種について、その生息地再生を行う上で重要な情報が得られた。また、行政や民間で行う生物多様性保全を目的とした湿地ビオトープを造成する上で必要な環境構造あるいは管理手法についての知見が得られた。これらの知見は福岡県生物多様性戦略を推進する際にも有用と考えられる。

５） 調査研究結果の独創性，新規性

福岡県版レッドデータブックにおいて絶滅危惧種として選定されている種について、その生息地再生を行う上で必要な環境構造を生活史の観点から整理した。また、新規に造成した湿地ビオトープの生物相が、造成後3年間でどのように変化していくのかを明らかにした。この過程で新規にできた環境に各生物種が侵入する順番や、希少水生植物に対する外来種の影響なども明らかにすることができた。

６） 成果の活用状況（技術移転・活用の可能性）

県内希少種の生活史に関する情報収集を進めることで、より効果的な生息地再生の提案あるいは生息地再生のためのマニュアルの作成が可能になると考えられる。また、本研究で得られた成果の一部は、自然環境課が作成する生物多様性公共工事配慮指針に活用されている。